

印欧祖語母音組織の研究 -研究史要説と試論-

著者	神山 孝夫
号	18
学位授与番号	234
URL	http://hdl.handle.net/10097/37044

かみ
神

やま
山

たか
孝

お
夫

学位の種類	博士(文学)
学位記番号	文第234号
学位授与年月日	平成18年10月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
最終学歴	昭58年3月 東京外国語大学大学院外国語学研究科修士課程修了
学位論文題目	印欧祖語母音組織の研究 —研究史要説と試論—
論文審査委員	(主査) 教授 千種 眞一 教授 後藤 齊 教授 後藤 敏文

論文内容の要旨

周知のように、印欧(=インド・ヨーロッパ)語比較言語学は過去2世紀にわたって輝かしい成果を築き上げた。だが、実のところ、その影では今日においても幾多の問題が解決の糸口も見出されないままに残されている。

小論の目的は、これら未解決の諸問題のうち、恐らく最大の難問と思われる、印欧祖語の母音組織と、かのグリム(Jakob Grimm)の命名によりアップラウト(Ablaut)とも呼ばれる母音交替現象が生じた経緯の謎を解き明かすべく、従来行われてきた様々な研究の成果を踏まえ、新たな試論を提出することにある。

第I章

印欧祖語の歴史性と再建成果見直しの必要性

(§1-17)

本章では前提として、従来行われた印欧祖語再建の不備を指摘し、今日得られている印欧祖語の音韻組織についても再考が必要であると主張した。

文証を持たない仮想された言語であるとはいえ、人間がコミュニケーションの手段として使用した自然言語であることが疑い得ない以上、印欧祖語も時間軸に沿って変化したことは明らかである。だとすれば、従来ややもすると静的に理解され、またそのような観点からのみ再建が試みられてきた印欧祖語に対し、むしろ動的なアプローチが必要となると考えられる (§1-2)。

近年、特にギンブタス(Marija Gimbutas)による考古学的研究によって、印欧祖語を話していたと思

われる民族(クルガン人 Kurgans)がほぼ特定されるに至っており、印欧祖語を話した民族がかつて存在したという想定、並びに印欧祖語が自然言語であるという想定に無理がないことが確認されている (§ 3-7)。

続いて、従来の静的な理解に立脚した印欧祖語再建に見直しが求められている場合の例として、印欧祖語の閉鎖音組織の再建の事情を略述した (§ 8-17)。

第Ⅱ章

印欧語比較言語学の誕生と母音組織の模索

(§ 18-51)

続く第Ⅱ章と第Ⅲ章では、過去2世紀にわたる研究の歴史をかなり詳しく紹介・吟味し、初源的母音組織と母音交替の解明が従来の方法からはおぼつかないことを確認した。

第Ⅱ章では、印欧語比較言語学が誕生する過程から、次章に記すような大きな進歩が成し遂げられる1870年代までの、いわば黎明期の間に、この学問領域においてなされた主な成果と、初源的な母音組織と母音交替現象についての理解の変遷をまとめた。

中世ヨーロッパにおいては、普遍史とも呼ばれるキリスト教的な歴史観が絶対的権威を持っており、その影響から、あらゆる言語の起源はヘブライ語にあると信じられていた。このような素朴な偏見がスカリゲル (Joseph Justus Scaliger)、ライプニッツ (Gottfried Wilhelm Leibniz) 等の貢献によって徐々に取り除かれる (§ 18) とともに、インド航路の発見によってヨーロッパとの関係が密となったオリエント以東への関心が急速に高まってゆく。特に、経済的事情によって心ならずも貿易商に転じた古典学者サセッティ (Filippo Sassetti)、イエズス会宣教師でインド文化の研究に励んだノービリ (Roberto de Nobili)、ハンクスレーデン (Johann Ernst Hanxleden)、カルメット (Jean Calmette)、ケルドゥー (Gaston-Laurent Cerdoux) 等の貢献によってサンスクリットの知識が、他方ではハイド (Thomas Hyde) やアंकティル＝デュペロン (Abraham Hyacinthe Anquetil-Duperron) によってアヴェスタの知識が、それぞれヨーロッパにもたらされるに及んだ (§ 19-23)。

このような時代を背景にしてジョーンズ (Sir William Jones) の有名な提言が発される (§ 24-26)。彼の後継者諸氏によってヨーロッパにおけるインド学が創始され (§ 27-28)、その1人ハミルトン (Alexander Hamilton) に学んだシュレーゲル (Friedrich von Schlegel; § 29-30)、次いで彼に倣ってパリで修業したポップ (Franz Bopp; § 31-32) によって、いわばインド学に基づく新たな言語起源論として印欧語比較言語学 (印欧語比較文法) が勃興する。

さて、この新たな学問領域において、印欧語の母音組織解明に向けて最初の一步を踏み出したのはデンマークのラスク (Rasmus Rask) であった。彼は困窮の中で神学を修めつつももっぱら言語研究に没頭し、北欧語を中心としてゲルマン語の比較研究を行う間に、後にグリムによって命名されることになるウムラウト (Umlaut) 現象とアップラウト現象の存在にはじめて気づいた (§ 33-39)。

若くしてドイツ・ゲルマン中世文芸の研究者として名を挙げたグリムは、はじめラスクの観察を2度にわたり謬見として否定し去ったが、数年後に突如翻意し、有名な『ドイツ文法』第Ⅰ巻第2版において、プライオリティーを明示しないままラスクの説を受け入れた。同書において彼はラスクに倣って母音の変化に2種の区別を認めてそれぞれウムラウトとアップラウトと命名するとともに、サンスクリットとゴート語の母音から得た直感により、印欧祖語の本来の母音組織が i - a - u であり、そのうちの a がヨーロッパ諸語において e a o の3母音に分かれるという説を提示した。ポップやベンファイ (Theodor

Benfey)によって控えめな異論が提出されたものの、グリムの見解は権威を獲得してしまい、その後半世紀の間信奉され続けることになった (§ 40-45)。

だが、祖語の a がどのような経緯から e a o に分かれることになるのかはその後も謎であり続け、グリムの見解を疑わぬままに問題解明に挑んだシュライヒャー (August Schleicher)、クルツィウス (Georg Curtius)、シェーラー (Wilhelm Scherer) 等の真摯な努力も、残念なことに、特に実を結ぶことはなかった (§ 46-51)。

第三章

母音組織理解の進展

(§ 52-100)

本章では、印欧語比較言語学の転換期となった1870年代から今日に至るまでの印欧祖語母音組織の再建とアップラウト現象解明に関する主な研究を追った。

1870年代にはヴェルナー (Karl Verner) の法則などを含めて矢継ぎ早に様々な発見がなされた。このような機運の中で、母音組織とアップラウトに関して大きな発見を達成したのはクルツィウスの弟子たちであった。まず、1876年にオストホッフ (Hermann Osthoff) が語幹の強弱という概念に到達し (§ 52-53)、弟弟子のブルクマン (Karl Brugman (n)) が同年これに基づいて有名な「鼻音ソナント (nasalis sonans)」を想定した (§ 54-57)。これによって、実質的に盈階梯とゼロ階梯の交替というアップラウトの1側面が早くも明らかとなる。

さらに同年、同じくブルクマンにより印欧祖語の本来の母音として従来の a ($=a_1$) 以外に a_2 なるもう1つの母音の存在が仮定される。これはすぐに認められたわけではないが、e と o の交替の発見へとつながる重要な一歩であった。

そこに、アップラウト研究を志してジュネーヴからクルツィウスの下に留学してきた若きソシユール (Ferdinand de Saussure) が、1878年と翌年、上記2人の先輩の発見に加えて、彼の想定する「ソナント的な付加音 (coefficients sonantiques)」A q と長母音との交替を一気に処理する斬新な方法を提案する (§ 58-62)。若干の補正を加えて整理すると、オストホッフとブルクマンが先鞭をつけ、ソシユールが到達した見解はほぼ下記のようにまとめることができる (§ 63)：

- I 印欧祖語には $a_1=e$ 及び $a_2=o$ の2つの母音があった；
- II 基本的な母音は e であり、これは一定の条件において o と交替する；
- III 印欧祖語の母音は一定の条件においてゼロと交替する；
- IV 印欧祖語の音節核は「母音」あるいは「母音+ソナント」から成る；
- V 音節核の母音がゼロに交替すると、隣接するソナントは単独で音節核となる；
- VI 機能的に見て i と u は本来的な母音ではなく、流音や鼻音と同じくソナントの一種(=「ソナント的な付加音」)である；
- VII これら以外にも未知のソナント的な付加音が存在する；
- VIII 母音とこれらのソナント的な付加音との結合から長母音が生じる；
- IX 単独で音節核となった場合、これらのソナント的な付加音は原則的にヨーロッパ語で a、インド・イラン語で i として現れる。

これらのうち網掛け部分についてはなかなか同時代人の支持が得られなかったが、I と II はソシユール以外にもテンネール (Esaias Henrik Vilhelm Tegnér)、コリッツ (Hermann Collitz)、トムセン (Vilhelm Ludvig Peter Thomsen)、シュミット (Johannes Schmidt) によってほぼ同時に発見された「硬口蓋音法則 (Palatalgesetz)」との関係で (§ 63-67)、また IX の一部はフィック (August Fick) による「印欧語のシュワー (schwa indogermanicum)」 (§ 68-72) の発見によって、それぞれ程なく定説に採り入れられる。しかし、残りの部分に関してはオストホッフ、ヒュップシュマン (Heinrich Hübschmann)、ベヒテル (Friedrich Bechtel) に酷評を受けたまま半ば忘れ去られ (§ 73-78)、学界の関心は暫時ブルークマンの法則の可否 (§ 79)、アクセントとアップラウトの関係 (§ 80)、第2のシュワー (schwa secundum; § 81) 等に移る。

学界の主流からは外れたものの、残ったソシユールの想定 VII、VIII、IX は、発表直後の 1879 年からクルツィウス門下の兄弟子であるメラー (Hermann Möller) によって支持され、また修正を加えられていた。彼によってソナント的な付加音に相当する「ラリングル (Laryngale)」は *EAQ* の 3 種に訂正され、これらに母音が続く音連続も考慮に加えられた。残念なことに、孤立したソシユールを擁護するメラーの研究は発表当時ほとんど知られなかったようだが、20 世紀になってからメイエ (Antoine Meillet) を介したソシユールの孫弟子キューニ (Albert Cuny) によって発掘されて繰り返し支持を受け (§ 82-83)、また他方ではフロズニー (Bedřich Hrozný) によって解説されたヒッタイト語に現れる *ḫ* とソシユールのソナント的な付加音との対応が、1927 年やはりメイエ門下のクリウオヴィッチ (Jerzy Kuryłowicz) によって指摘されるに及んで、一度死んだかに見えたソシユールの想定 VII、VIII、IX の真価がようやく認められると気が訪れる。

その後、バンヴェニスト (Émile Benveniste)、スタートヴァント (Edgar Howard Sturtevant)、クヴレール (Walter Couvreur)、ペーザーセン (Holger Pedersen) 等が続々とこれを追認し (§ 84-89)、1957 年オスロの第 8 回国際言語学会議と翌々年オースティンで開かれた “Evidence for Laryngeals” と銘打つ会議、及びその後まとめられた同名の論文集等の影響によって、ソシユールにはじまる「ラリングル理論 (Laryngaltheorie)」はついに印欧語比較言語学の常識に属すに至った (§ 90)。これにより、ソナントの振る舞いを捨象して要点のみ記せば、印欧祖語の母音組織と母音交替に関し下記が大方の賛同を得ることになった：

- 1) 印欧祖語に本来存在した母音は 1 つであり、*e* と記される；
- 2) この母音は *o* 及びゼロと交替する；
- 3) 「ラリングル + 母音」から *e* と *o* のみならず、新たな母音 *a* が生じる；
- 4) 「母音 + ラリングル」から長母音 *ē*、*ā*、*ō* が生じる；
- 5) これら長母音は印欧語のシュワー *ə* と交替する。

(1)～(5)では確かにソシユールの I～IX の不備が若干訂正されているものの、特にラリングルとシュワーの関係 (§ 91-96)、及び *o* 階梯発生の原因 (§ 97-100) の 2 点がまったく未解決であり、どのような本来的な状態から、どのような経緯を経て (1)～(5) が得られたのかは謎のまま今日に至っている。

第 IV 章

言語類型論と印欧祖語

(§ 101-155)

上記のような閉塞状態を脱するには、従来の音韻の面のみに注視する姿勢を改め、新たなアプローチ

を模索すべく印欧祖語の文法的な変遷をやや巨視的に見直すべきと考えた (§ 101-103)。このような趣旨から、本章では印欧祖語の類型的な変化を探った。

まず言語類型論が成立する過程を整理した。フランスの文献学者ジラル神父 (Abbé Gabriel Girard) と経済学の祖スミス (Adam Smith) の先駆的業績 (§ 104-107) とシュレーゲル弟による言語の2分類 (§ 108-109) を経て、シュレーゲル兄 (August Wilhelm von Schlegel) が形態に基準を置いて孤立語、膠着語、屈折語から成る古典的な言語類型に到達する (§ 110-112)。これが逡巡を経てフンボルト (Wilhelm von Humboldt) に採用され、また新大陸の言語データから抱合語を加えた4つの言語類型が普及することになった (§ 113-117)。

このような形態論を重視した古典的な類型論では、孤立語が原始的で、膠着語が中間的な進化段階にあり、屈折語がもっとも進化した言語類型であるという誤った価値判断が下され (§ 118-120)、印欧祖語もギリシア・ラテン語やサンスクリットの祖先であるからには、これらのように高度に発達した屈折語に違いないと考えられた。だが、すでにポップが19世紀初頭の段階で気づいていたように、語の構成に着目すると、印欧祖語は屈折語に到達する以前の段階ではむしろ膠着語であったと考えられる (§ 121-124)。

19世紀終わってから世界各地の言語についての調査・研究が進み、語の形態のみに注目する古典的な類型論の不備が徐々に認識されてきた。それにつれてサピア (Edward Sapir)、マテジウス (Vilém Mathesius)、スカリチカ (Vladimír Skalička) 等が新たな類型設定を試み、また大戦後はグリーンバーグ (Joseph Harold Greenberg) による語順に基礎を置いた類型論等が世に問われた (§ 125-132)。

一方、ウスラル (Петр Карлович Услар)、シュールハルト (Hugo Ernestus Mario Schuchardt)、マール (Николай Яковлевич Марр)、ディル (Adolf Dirr) 等によるコーカサス諸語等の調査・研究を通して、ヨーロッパ人の目には奇異な文の構成原理の存在が知られるようになり、この種の言語は「能格言語」と呼ばれるようになった (§ 133-140)。研究の進展に伴い、能格言語とは似て非なる「活格(動格)言語」の存在も知られるに至り、このような文の構成原理を基にした言語類型論と言語発達論の可能性がメッシュャニーノフ (Иван Иванович Мещанинов)、カツネリソーン (Соломон Давидович Кацнельсон) 以来検討され、近年クリーモフ (Георгий Андреевич Климов) によって「内容(重視の)類型論」と名付けられた (§ 141-146)。

さて、この新たな類型論の観点から見ると、印欧祖語はこれまで想定されてきたような主格と対格を基礎とする「対格言語」の状態に至る以前に、一貫して「動」(active) と「静」(inactive) の対立に基礎を置く「活格言語」の状態を経験したと思しき痕跡が見出される。これと同種の見解はすでに1873年にポットによってはじめて表明され、世紀が替わってからユレンベック (Christianus Cornelius Uhlenbeck)、ウェイク (Nikolaas van Wijk)、ペーザーセン、ヴァイヤン (André Vaillant)、ヘンリクセン (Hans Hendriksen)、マルティネ (André Martinet)、ラロッシュ (Emmanuel Laroche) 等によって散発的に追認を受けたが、西欧では「能格言語」と「活格言語」がやや混同され、特に注目を浴びることはなかった。だが、旧ソ連においてはトロンスキー (Иосиф Моисеевич Тронский)、デスニーツカヤ (Агния Васильевна Десницкая)、ペレリムーテル (Илья Аронович Перельмутер)、クリーモフ、ガムクレリッゼ (Тамаз Гамкрелидзе)、イヴァーノフ (Вячеслав Иванов) 等によって研究の進展を見た。印欧祖語がかつて「活格言語」であったという想定は、確かに現状では広く学界の認知を得ているとは言い難いが、シュミット (Karl Horst Schmidt) やレーマン (Winfred Philipp Lehmann)、わが国でも松本、千種、山口等に徐々に支持を広げるに至っており、もはやその正しさは疑いがないと思われる。

以上からすれば、印欧祖語はかつて想像されたような屈折的「対格言語」ではなく、膠着的「活格言語」であったと考えられることになる (§ 147-155)。

第V章

印欧祖語母音組織再考

(§ 156-217)

以上を踏まえ、本章では印欧祖語の母音組織と母音交替現象が誕生した経緯についての新たな試論を提出した。印欧祖語が言語類型論的に徐々に性質を変化させつつ、発達の節々で生じた極めて音声学的に平易なプロセスが重なったと想定することにより、*eのみを有する初源的な1母音組織から出発して、最終的に長短の *i* e* a* o *u と *ə から成る古典的な母音組織と、*e / ゼロ、*e / *o、*ē * ā *ō / *ə の交替現象を導くことができる。

まず、印欧祖語の最古の状態について検討し、極めて仮説性の高い想定ではあるが、膠着的な活格言語のさらに以前の段階は、単音節語のみから成る孤立語であったと仮定した (§ 156-161)。続いて、母音として *e のみを含む初源的音韻組織と (§ 162-166)、この仮定に従った文法組織 (§ 167-171) を素描した。

統語関係を明示しコミュニケーションを円滑化する必要性から *-(H₁)es を加えた活格が誕生するとともに、印欧祖語が初源的な単音節語のみを有する孤立語的状态から膠着語的な活格言語に発達したとすれば (§ 172-177)、概ね下記のような経緯によって母音組織が徐々に形成されたとみなしうる (§ 210)。

- ① 無アクセント母音の誕生：想定される最古の段階の印欧祖語は常に *e を音節核とする単音節語のみから成っていた；複音節語の誕生とともにストレスによるアクセントが生まれ、アクセント音節は本来の *e を保持したが、無アクセント音節は一律にこの母音を *[ə] に弱化させた (§ 178-179)；
- ② ゼロ階梯の誕生：*[ə] はソナントに隣接している場合に完全に縮減し、代わって隣接のソナントが音節核となった；これにより、新たな音節核音として母音 *i *u と成節の流音と鼻音が生まれた (§ 180-182)；
- ③ o 階梯の誕生：噪音（ラリンガルを除く）には含まれた *[ə] は「音節保存の傾向」によって保持され (§ 180-182)、第2の母音音素 *o となった (§ 183-188)；その後、形態論拡充の過程において、本来の音声環境とは無関係に *e と *o とゼロの交替が屈折・派生にも利用されるようになる (§ 189-191)；
- ④ ラリンガル消滅の余波 (§ 192-200)：*H₁e *H₂e *H₃e > *e *a *o より第3の母音音素 *a が誕生した (§ 203-205)；母音連続が生まれ、印欧祖語は弁別的な長さを獲得した；母音が後続しない *eH₁ *eH₂ *eH₃ より長母音 *ē *ā *ō が誕生した (§ 201-202)；ラリンガルに隣接する位置に保持された *[ə] は第4の母音音素 *ə (印欧語のシュワー) となった (§ 206-209)；恐らく、これらのプロセスが終了する直前の段階で音節保存の傾向が失効する (§ 212)。

本来のアクセント音節に生じた母音

*H ₁ e		*He		*e
*H ₂ e		*Ha		*a
*H ₃ e		*Ho		*o
*eH ₁	⇒	*eH	⇒	*ē
*eH ₂		*aH		*ā
*eH ₃		*oH		*ō

本来の無アクセント音節に生じた母音

*ĕ	⇒	*[ə]	⇒	ゼロ /+R *[ə] (その他)	⇒	*o /+T *[ə] /+H	⇒	*ə
①		②		③		④		

(“R、T、H”はそれぞれソナント、噪音、ラリンガルを、“/+”は問題の音節にこれらの音が含まれることを示す。)

以上により、これまでその成立の経緯について何ら満足な説明が知られていなかったアップラウト現象、すなわち *e とゼロ、*e と *o、長母音とシュワーとの交替は、本来的な音声環境とアクセントの作用のみにより、以下の順序で誕生したと考えられることになる (§ 211) :

本来のアクセント			本来の音声環境	
	あり	なし		
1	*e	ゼロ	R_/_R	②
2	*e	*o	T_T	③
3	*ē *ā *ō	*ə	_H	④

これより、印欧祖語の母音組織と母音交替現象を含めて、従来、主として内的再建の見地から得られていた古典的な音韻組織が完全に得られる (§ 213)。だとすれば、作業仮説として利用した「最古の印欧祖語が孤立語であった」とする仮定と「音節保存の傾向」は、印欧祖語の歩みの中に実際に存在したプロセスに等しいと期待される。ただし、「音節保存の傾向」が失効した相対的な時期の特定についてはなお慎重な検討を要すると思われる (§ 214)。

さらに、初源から存在したはずの1つの母音さえも音韻論的には無価値であって、最古の印欧祖語は母音音素を持たない言語であったと仮定することさえ可能かもしれない。だが、この極めて危うい仮説を説得的に提示することは困難であり、やむなく第Ⅴ章末にその理路の概略を記すに留めた (§ 215-217)。

付節

日本における印欧語比較言語学の系譜

(§ 218-242)

巻末に付節を設け、日本における印欧語比較言語学の成立に関わった方々への敬意を込めて、もはや

存命でない下記の方々の生涯と業績を整理した：加藤弘之 (§ 218)；南条文雄^{ふんゆう}と笠原研寿^{かさわらけんじゅ} (§ 219)；チェンバレン (Basil Hall Chamberlain; § 220)；神田乃武^{ないぶ} (§ 221)；フローレンツ (Karl Adolf Florenz; § 222)；ケーベル (Raphael von Koeber; § 223)；上田萬年^{かずとし} (§ 224)；高楠順次郎 (§ 225)；藤岡勝二 (§ 226)；新村 出^{しんむら いずる}と八杉貞利 (§ 227)；ロレンス (John Lawrence) と市河三喜 (§ 228)；田中秀央^{ひでなか} (§ 229)；小林淳男^{あつ} (§ 230)；呉 茂一^{くれ しげいち} (§ 231)；神田盾夫 (§ 232)；辻 (福島) 直四郎 (§ 233)；小林英夫 (§ 234)；前島儀一郎 (§ 235)；泉井久之助^{いずい} (§ 236)；高津春繁^{こうづ} (§ 237)；服部正己 (§ 238)；岸本通夫 (§ 239)；矢野通生 (§ 240)。末尾に、現状におけるわが国の印欧語比較言語学の抱える問題点と、将来へ向けての課題について私見を添えた (§ 241-242)。

論文審査結果の要旨

本論文は、伝統的に再建された印欧祖語母音組織の蓋然性の限界を克服するために、印欧語母音研究の歴史の批判的な検討を踏まえ、音声学的分析を厳密に適用しながら、新たに提案されつつある内容類型論の成果をも考慮に入れることによって、積年にわたり最大の難問の一つとされてきた印欧祖語の母音組織と母音交替(アップラウト)現象がどのようなプロセスを経て成立したのかという問題を解明しようとして試みたものである。

第Ⅰ章「印欧祖語の歴史性と再建成果見直しの必要性」において論者はまず、近年のギンブタスを中心とする考古学的研究による印欧語を実際に話した民族とされるクルガン人の特定、原初的な閉鎖音組織等に関する言語類型論的視点からの再考などを契機として、静的視点から得られて半ば権威化している印欧語比較言語学の成果を見直す機運が高まりつつあるとの認識に立って、最大の難物である印欧祖語原初母音組織とアップラウトの謎に挑もうとする。従来理論的要請とされてその歴史性を認められなかった印欧祖語が動的な歴史性を付与される自然言語であると想定することによって、従来想定されてきた初源的母音組織と複雑かつ不可解なアップラウトは印欧祖語の最終段階にのみ想定されるべき現象であって、それ以前にこの現象を生み出した過程があったことは論理的必然であるとの主張は、印欧語学に斬新な成果がもたらされるであろうことを十分に予想させるものである。

第Ⅱ章「印欧語比較言語学の誕生と母音組織の模索」では、印欧語比較言語学が成立する過程において印欧祖語の母音組織がどのように把握されてきたのかを、言語学史的に詳細に辿る。特にフランス人宣教師ケルドゥーの先進性への言及が注目される。印欧祖語の存在をはじめて想定したといわれるサー・ウィリアム・ジョーンズの有名な提言から、ポップによるインド学に基づく印欧語比較言語学の勃興を受けて、印欧語の母音組織解明に向けて最初の一步を踏み出したラスクについては、特に『アイスランド語(古ノルド語)文法』(1811)におけるウムラウト現象とアップラウト現象の存在についての言及、実際にはポップの Conjugationssystem (1816) が出る2年前に完成していたがその2年後に出版された『古ノルド語(アイスランド語)の起源に関する研究』(1818) が実質的には印欧語比較言語学の開祖とされるに相応しい業績であったことが説かれる。グリムがその『ドイツ文法』第Ⅰ巻第2版においてプライオリティーを明示せぬままラスクの説を受け入れ、ラスクに倣って母音の2種類の変化にウムラウトとアップラウトと命名したが、後者をゲルマン祖語の現象とみなして印欧祖語における母音交替現象として解明する努力はなかったとした上で、サンスクリットとゴート語の母音組織を主な根拠にして提示した、印欧祖語の本来の母音組織が i-a-u であり、a が多くのヨーロッパ諸語で e a o に分化したとする説は、ポップやベンファイによる直感的で控えめな異論が提出されたものの、サンスクリット盲信とグリムの

權威の呪縛によって1870年代末に至るまで金科玉条のごとく信奉され続けることになったと指摘する。

第三章「母音組織理解の進展」では、印欧語比較言語学の転換期となった1870年代から今日に至るまでの印欧祖語母音組織の再建とアップラウト現象解明に関する研究を精確に追う。まず、1876年にオストホッフが母音交替のメカニズム解明へとつながる強弱二つの語幹を区別し、同年ブルークマンがこれに基づいて「鼻音ソナント」を想定、今日で言う「盈階梯」と「ゼロ階梯」の交替というアップラウトの一つの側面が明らかになったと指摘する。さらに、同年のブルークマンによる印欧祖語の本来の母音として従来の $*a$ ($=*a_1$) 以外にもう一つの母音 $*a_2$ が存在していたとの想定は、 $*e$ と $*o$ の交替の発見へとつながる母音組織再建における大きな一歩であったとするが、ソシュールが二つの「ソナント的付加音 (coefficients sonantiques)」の想定を中心として到達した見解を論者は9項目に明快にまとめる。ソナント的付加音に相当する「ラリングル」がメラーにより3種類 (今日の表記で H_1 , H_2 , H_3) に訂正されたことや、ヒッタイト語に現れる h とソナント的な付加音との対応がクリウオヴィッチにより指摘されたことなどを経て、ソシュールに始まる「ラリングル理論 (Laryngaltheorie)」が印欧語比較言語学の常識に属するに至り、印欧祖語の母音組織と母音交替に関しては次の5点が大方の賛同を得ることになったという：(1) 印欧祖語に本来存在した母音は e のみである；(2) e は o と交替する；(3) 「ラリングル+母音」から e と o のみならず、新たな母音 a が生じる；(4) 「母音+ラリングル」から長母音 \bar{e} , \bar{a} , \bar{o} が生じる；(5) これら長母音は印欧語のシュワーと交替する。論者は特にラリングル (すなわち子音的な H) とシュワー (すなわち母音的な o) の関係と o 階梯発生の原因の2点が未解決であるとの認識に立って、前者については音声学的観点からマルティネにより提案されたラリングル子音説を支持して、実際の音価を声門摩擦音、口蓋垂/咽頭摩擦音、円唇口蓋垂/咽頭摩擦音と推定する。印欧祖語に歴史性を認めて音声変化を追求するためには音価の推定が不可避であり、これによって再建見直しの作業は俄然現実味を帯びてくる。後者については相対年代を考慮して、形態論的条件、アクセント、音声環境のいずれもが o 階梯発生に関わったとして、こうした多重的・複合的な発想が o 階梯誕生の謎を解く鍵であると断言する。

第四章「言語類型論と印欧祖語」では、特に印欧祖語の類型論的同定に関して、「能格言語」と「活格言語」の存在から文の構成原理に基づく言語類型論と言語発達論の可能性がメツシャニーノフ (I. I. Meščaninov)、カツネリソン (S. D. Kacnel'son) 以来旧ソビエトで検討され、クリーモフ (G. A. Klimov) によって確立された「内容類型論」 (kontensivnaja tipologija) が極めて重要であると判断した上で、印欧祖語は従来想定されてきたような「対格言語」の状態に至る以前には「活格言語」であった可能性を指摘する。「印欧祖語活格言語説」はまだ広く学界の認知を得ているとは言い難いが、ソビエト・ロシアではデスニーツカヤ (A. V. Desnickaja) による印欧祖語における直接補語カテゴリーの発達の研究、ペレリムテル (I. A. Perel'muter) による印欧祖語とギリシア語の完了形の研究、クリーモフによる活格構造の総合的な研究、ガムクレリッゼ (T. Gamkrelidze) とイヴァーノフ (V. V. Ivanov) の印欧語と印欧人に関する研究などに言及して支持を表明する。

第五章「印欧祖語母音組織再考」で論者はまず、これまでの印欧語比較言語学における母音研究史および類型論的考察を踏まえて、印欧祖語の母音組織と母音交替現象がどのように成立したのかという問題の解決に向けて、仮説的な試案を提起する。それによれば、音声学的・類型論的蓋然性およびソシュールにはじまる喉音理論に基づき、初源的母音組織を $*e$ のみの単母音組織と仮定し、初源的文法組織は $*Ce(R)C/*C(R)eC$ 構造の単音節語の形状を取る孤立語であり、形態論はまだ発達せず品詞の概念も希薄であったがゆえに、一定の語順が語の統語的役割を表示していたが、3肢文に関しては、固定した語順よりもむしろ $*reg H_1es$ 「主在」と $*kwen H_1ed$ 「犬食」という2文の組み合わせから $*reg H_1es kwen H_1ed$ 「主が犬を食べる」というシンタグマが派生して、孤立語たる最古の印欧祖語が膠着語・活格言語への移行

が達成されたと推測する。

単音節語のみからなる最古の状態から助詞・接尾辞を添加した複音節語を有する状態へ移行したとの想定により、アクセントが誕生し、無アクセント音節核の弱化と脱落から「正常階梯」と「ゼロ階梯」(ソナントに隣接)の別が生じたとした上で、論者は「音節保存の傾向」と称する仮説を提示して、無アクセント音節で噪音(ラリングルを除く)に隣接した *e の異音たる弱母音 [ə] が円唇性を獲得して音素に格上げされ、第2の母音 *o が誕生し、これこそが o 階梯の起源であると主張する。アクセントと音声環境の関わりに異音の音韻化という3要因を複合的に取り込み、これに祖語の形態論的発達の視点と「音節保存の傾向」という仮説を加えて、*o 発生の際緯に説得力ある解決を見出したという点ですぐれて独創的な貢献であると判断される。さらに *H₂e より生じた第3の母音 *a に続き、第4の母音 *ə はラリングルに隣接する位置で *e の異音であった縮減母音が *[ə]H₁, *[ə]H₂, *[ə]H₃ > *[ə]H > *ə のようにラリングルが合一後に無音化して生まれたと分析して、従来同一の音韻に起因するかの様な印象をもたれてきたラリングルとシュワーが別個の音韻現象であることを明らかにした。

印欧祖語の再建作業自体が理論的要請であったがゆえに祖語の歴史性の問題が等閑視されてきたこととあいまって、20世紀初頭に至って一応の合意を得た印欧祖語母音組織の成立の問題がその後もなおその蓋然性を疑われぬまま実質的な進展を被らなかった状況に思いをいたすとき、本論文において提示された試論はこの停滞を脱する手がかりとなりうる果敢な挑戦であることは間違いないところである。しかし、前印欧語に想定された形態統語構造の証左となる痕跡を、ヴェーダ語をはじめとする初期印欧語に求める厳密な文献学的作業が重要な課題として残されている、ということは銘記しておくべきであろう。音声の実質・音声学的条件を重視する立場に徹底しつつ、本論文は欧米の類型論とは一線を画して独自の発展を遂げたロシア・ソビエト言語類型論の成果を積極的に取り込むなど、伝統的な枠組のみでは把握し得なかった音韻現象が新たな知見によって解決の有力な糸口を与えられており、その独創的な問題提起が斯学の発展に寄与することは疑いを容れない。今後本論文を基礎として前印欧祖語における母音組織および母音交替現象に関する議論が一層活発化する機運が高まるものと期待される。

よって、本論文の提出者は、博士(文学)の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。